

### 俳句の中の鳥獣戯画（三）

池田亮二

その子規にも見立ての句で遊んだ時期がありました。子規は東大を中退して日本新聞に入社し、明治二十六年に新設した俳句欄を任されます。時は日清戦争前夜で政界は軍備拡張の可否をめぐる大荒れで、内閣も議会も右往左往していました。新聞も論陣を張り政権批判を行う。そんな中で、俳句も夢を食って生きているようなものでなく時事詠をもって紙面を飾れないかという課題が出されたのです。子規にとってそれが本意かどうかはわかりませんが、若さと野心で才智をもてあましていた彼にはお安い御用で、次々と時事諷詠的な句をものしたのです。

小石にも魚にもならず海鼠かな 子規

鞭あげて入日招くや猿まはし 子規

海鼠とは政界のごたごたの中で遊泳し獵官に励む政治家、官僚たち。猿廻しとはそれらを牛耳る伊藤博文、山県有朋などのボスの見立てのようです。一見、自然詠でありながらこういう隠喩を含ませるのはさすがです。子規の友人は「かれが若くして病床に臥すことにならなければ、文学ばかりでなく政治経済の面でもひとかどの人となっていたらろう」と言っていますが、そんな片鱗をもうかがわせます。

青蛙おのれもペンキぬりたてか 芥川龍之介

鮮やかな印象派の絵画のように鑑賞されますが、これは古池のほとりで詠んだのではなく、下宿に訪れたパリッとした背広姿の友人をひやかして詠んだものと種明かしされます。当時流行った「エノケンの洒落男」という唄で、田舎で一番といわれた伊達男がさっそうと銀座を歩く姿が「そもそもその時のスタイル。青シャツに真っ赤なネクタイ、山高帽子にロイド眼鏡…」というものだった。そしてペンキという油性塗料は元来日本になかったもので、大正モダンの象徴のように洋風建築の役所や警察の壁や塀、看板などに塗りたいったものです。つ

まり、このペンキ塗りの青蛙、叩けば文明開化の音がしたことでしょう。青蛙と言えばこんな句もあります。

**故郷遠し線路の上の青ガエル**                      **寺山修司**

少年寺山修司は、死ぬほど東京にあこがれていました。青森のはずれの町で育った修司は「わたしはホントは東京で生まれたのではなかったか」と思い、「わたしは東京に恋していた」と書いています。その思いがこの青蛙に托されているようです。線路とは東京への道であり、「夜汽車の汽笛を聞くたびに私は風呂敷包みをまとめなければと焦慮にとらわれた」のです。その東京とは、美空ひばりが歌っていて、ジャイアンツの川上や青田がバットを振り廻してスタンドを沸かせ、彼が愛好するボクシングジムで汗が飛び散っている世界でした。そして、父が戦死し、母に見捨てられた十九歳の青蛙は、上野行の汽車に飛び乗ります。とりあえず書を捨て町へ出よう。それはペンキ塗りの伊達男どころか、泥臭い井戸の底から這いあがった蛙の姿でした。

**大望いまも線路をよぎる土蛙**                      **寺山修司**

作者にそんな作意はない、「見立て」とは評者の後講釈に過ぎん、と言われるむきもあるかも知れませんが、そのことは読む人次第ということにして、俳諧の中で描かれる鳥獣戯画を探して鑑賞するのも一興ではありましょう。

完